

# 大安寺報



名句・名言に学ぶ

伊集院静 (小説家)

「人はそれぞれ事情をかかえ、平然と生きていく」

今年も昨年以上に桜の開花が遅く、あらためて、「自然は人間の思うようにならない」と実感いたしました。とはいえ、桜の次は藤の花、そして睡蓮の花と、花々は、さも平然と季節の変化に合わせて花開き、私たちの目を楽しませてくれます。しかしながら、考えてみますと、これらの花々は厳しい季節に耐え、その暁に花を咲かせるもの。華やかなありようの裏には、目に見えない厳しい背景があるのです。

冒頭のことばは、伊集院氏の著書『大人の流儀』の中の一節で、氏が前妻の死の混乱の中で前妻の実家にタクシーで戻るときに出逢った母子とのエピソードのもの。「自分自身の事情など、他人にはわからないものだ」という事実が気づき、そのことを噛みしめたことばです。私たちは苦悩の中に置かれた時、ともすると周囲の人々の様子が幸せそうに見える、「自分の苦しみを、何故かわかってくれないのか」との思いにかられるものです。しかし、その周囲の人々もまた、実はそれぞれに

事情をかかえ、それに苦しみ、悩みながらも、平然であるうとして生きている。苦しみの中にある時にこそ、そのことを噛みしめる必要があるのではないでしょうか。

明治の俳人・正岡子規は「悟りという事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違いで、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった」ということばを残しています。このことばは、伊集院氏の心情を、さらに積極的にとらえたことばではないでしょうか。肺結核に由来する脊椎力リエスの激痛に耐え、たどりついたこの境地については、大本山永平寺の前貫主・故宮崎禅師も正岡子規のことばを引用し、「死ぬときが来たら死んだらいいんやし、平気で生きておれるときは、平気で生きておつたらいいのや」とおっしゃられました。人間は、苦悩に直面し、乗り越えた時に、飛行機

で雲をつきぬけた時のような心境に至ります。その心境こそが、「禅」が目指す「かりとした」境地なのです。



合掌

## 仏事

### Q & A

第十六回

Q. 「葬儀の際に、白い布を肩にかけ、途中ではずすのはなぜ？」

A. 葬儀の際、近親者が身に着ける白いさらし布を「イロ」といい、焼香を終えて取り去る風習があります。白い布を身に着けるのは、昔の喪服が白だったことの名残。現在は黒が一般的ですが、かつては男女とも白が正装として用いられていました。「白」は「清浄無垢」を意味し、忌明けまで、身と心を清らかにして過ごすという意味合いがありました。花嫁衣裳の「白無垢」は「一旦、生家の娘として死んで、婚家で新たに誕生する」という意味があるそうです。

### 当寺の最新情報をチェック!

■大安寺ホームページ

<http://www.daijanji.jp>

■大安寺携帯サイト

<http://keitai.daijanji.jp>



@daijanji2010

※行事予定などをお知らせします。



facebook

<http://www.facebook.com/daijanji>

大安寺の宗旨：曹洞宗 本山：福井県永平寺・神奈川県總持寺 高祖：道元禪師 太祖：瑩山禪師  
ご本尊：釈迦牟尼仏 本尊唱名：南無釈迦牟尼仏 (なむしゃかむにぶつ)